円山動物園基本方針「ビジョン 2050」
（円山動物園ポスト基本構想）第６回検討部会

平成 30 年７月 30 日（月）13:30～15:30
札幌市円山動物園　動物プラザ

議事次第

１．開会

２．議事

（１）報告

ア）円山動物園基本方針「ビジョン 2050」の進捗について

イ）今後のスケジュールについて

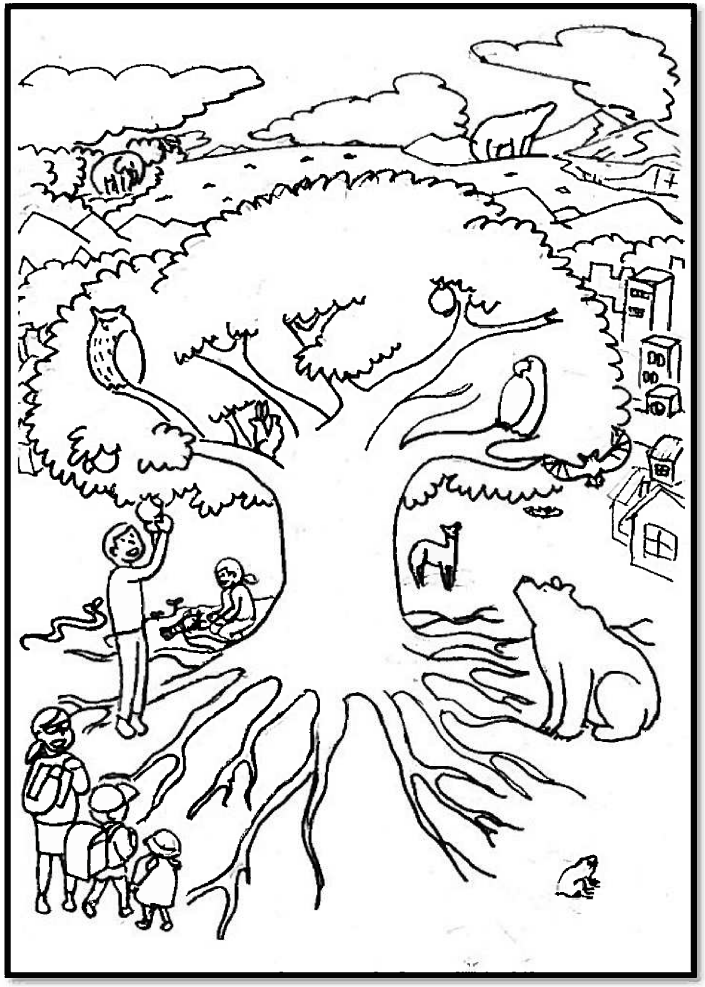
平成 30 年８月上旬　環境局関係部課長会議
平成 30 年９月下旬　庁内関係部長会議
平成 30 年 10 月中旬　庁内関係局長会議
平成 30 年 10 月下旬　市民動物園会議
平成 30 年 11 月上旬　市長副市長会議
平成 30 年 12 月上旬　議会説明
平成 30 年 12 月　パブリックコメント
平成 30 年２月　確定、公表

（２）意見交換

ア）円山動物園基本方針「ビジョン 2050」について

３．閉会

裏表紙



編集・発行
札幌市円山動物園

〒064-0959 札幌市中央区宮ヶ丘3番地1
電話：011-621-1426

表紙

2018年７月30日
第６回検討部会

札幌市円山動物園基本方針

ビジョン2050

「自然と人が共生する社会」
を目指して

開園100年に向け進む道

表紙裏

市長の顔写真

基本方針「ビジョン2050」の策定にあたって

○○○。

○○○。

○○○。

○○○。

円山動物園は、開園100年目の佳節を迎える2050年に向けて、目指すべき将来像を「自然と人が共生する社会」として、ここに円山動物園基本方針「ビジョン2050」を策定しました。

札幌市長　秋元 克広

はじめに

地球上には、知られているだけで約175万種、未知のものを含めると3,000万種とも推定される生き物が存在しています。地球上の生命はそれぞれ単独では生きながらえることはできず、様々な恩恵を与え合う生態系を作り、生命を維持しています。こうした生きものたちの豊かな個性とつながりのことを生物多様性と言います。人間もその例外ではなく、自然環境、生態系から得られる恵みを得ることで、日々の暮らしが成り立っており、地球上の多様な文化も含めて、自然環境・生態系の多様さがそれらを生み出し支えています。しかし、開発や開拓など人間の活動が原因で、自然淘汰をはるかに上回る１年間に４万種といもいわれるスピードで絶滅していると言われております。こうした生物多様性を保全することは、決して自愛に基づく行動ではなく、自らの暮らしを守るために必要な行動なのです。

一方で、地球上では、急激な人口増加により、現在76億人の世界人口は、2030年までに86億人、2050年に98億人、そして、2100年には112億人に達すると予測されております。

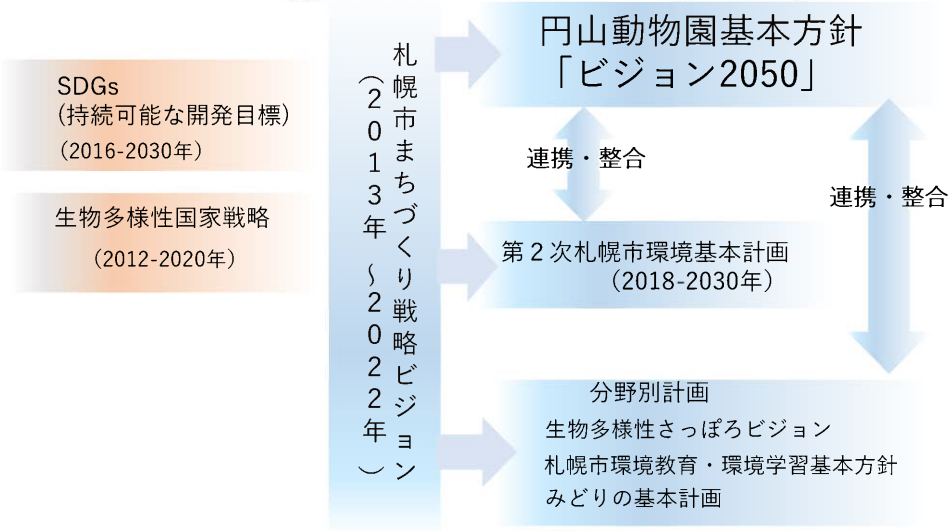
このような中、1992年６月の国連環境開発会議において、生物多様性条約の提起と署名が開始され、1993年12月、本条約が発効されました。

また、2015年９月には、国連持続可能な開発サミットで、貧困に終止符を打ち、地球を保護し、すべての人が平和と豊かさを享受できるようにすることを目指す「持続可能な開発目標（SDGs）」が採択されました。

こうしたことを背景に、札幌市においても、1995年に制定した「札幌市環境基本条例」に基づき策定した「札幌市環境基本計画」を2018年に改定したほか、2013年には「生物多様性さっぽろビジョン」を策定するなど、「環境首都・SAPP_RO」を目指し、着実に環境保全に向けた取り組みを推進しております。

特に円山動物園では、安全な施設に動物を保護して、それらを育てて増やすことにより絶滅を回避する「生息域外保全」や飼育動物を介して生息地域の環境保全を伝えるなど、動物園だからこそ寄与できる生物多様性の保全の取り組みがあります。

円山動物園ビジョン2050は、札幌市の計画等と整合を図り、こうした取り組みをさらに推進し「環境首都・札幌」を実現するための指針として位置付けます。



目次　contents

Ⅰ　円山動物園の目指す未来

１　円山動物園ビジョン２０５０・・・・・・・・・・・・１

２　基本理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

３　取り組みの構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

Ⅱ　基本理念に基づく取組

１【保全】生物多様性を保全する・・・・・・・・・・・・３

２【教育】自然の大切さと動物の魅力を伝える・・・・・７

Ⅲ　基本理念を支える取組み

１【調査・研究】動物のこと環境のことを探求する・・１１

２【リ・クリエーション】楽しい空間を創造する・・・１３

３【動物福祉】すべての命に最良の暮らしを・・・・・１５

４【連携】力をあわせて共に未来へ・・・・・・・・・・１７

Ⅳ　実現するために

１　コレクションプラン・・・・・・・・・・・・・・・・１９

２　実施体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１

３　行動指針・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２

Ⅴ　検討経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５

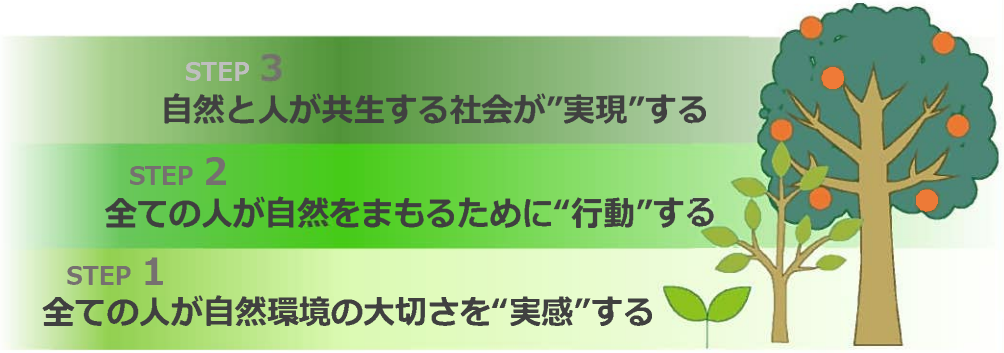
Ⅵ　動物園概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７

Ⅰ 円山動物園の目指す未来

Ⅰ-1. 基本方針「ビジョン2050」

円山動物園が2050年に目指すべき将来像を「自然と人が共生する社会」とします。

人が自然環境の一部であることを実感し、誰もが自然の必要性を感じ行動する。そんな社会をみんなで実現させましょう。



Ⅰ-2. 基本理念

保全と教育

円山動物園は"保全"と"教育"の二つの基本理念を掲げ、「自然と人とが共生する社会」を目指します。

【保全】生物多様性を保全する

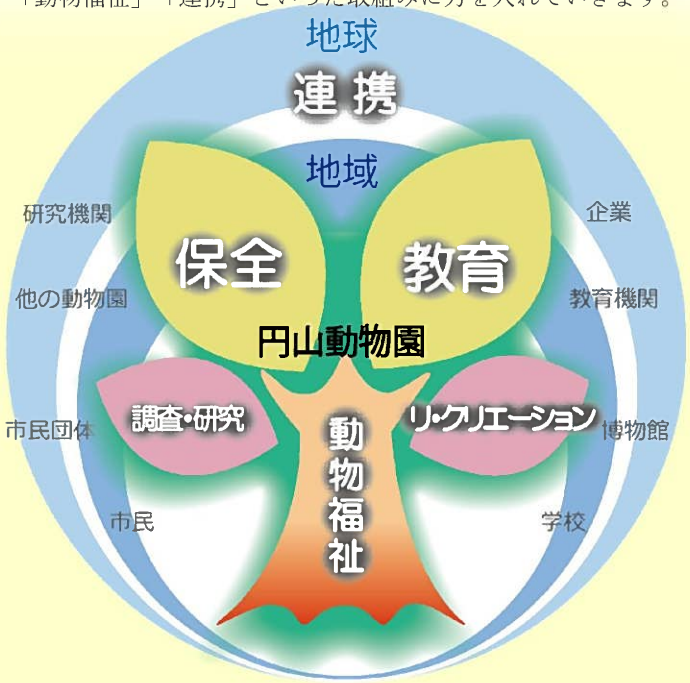
地球上の動植物がかつてない速さで絶滅しています。私たちの日常生活が、地球の環境を変化させ、生態系に影響を与えています。このまま、生物種が失われていくと人類も存亡の危機に直面します。円山動物園は、生態系・種・遺伝子の３つのレベルで捉えられている 生物多様性の保全に取り組みます。

【教育】自然の大切さと動物の魅力を伝える

各地の野生動物種を展示する動物園だからこそ、動物を通して「自然と人が共生する社会」の必要性を具体的に発信することができます。楽しさや感動、記憶に残る体験を通して、自然環境の大切さ、動物の素晴らしさや魅力を伝えます。

Ⅰ-3. 取り組みの構図

「自然と人が共生する社会」の実現に向け、「保全」と「教育」の基本理念を実践・展開していくためには、それらを支えるいくつもの取組みが必要です。円山動物園は、「保全」と「教育」に加えて、「調査研究」「リ・クリエーション」「動物福祉」「連携」といった取組みに力を入れていきます。



イラストは、円山動物園を一本の「木」にたとえ、円山動物園の取り組みの位置づけを表しています。

まず基本理念として掲げる『保全』と『教育』という葉が最も大きく高い位置についています。たくさんの葉を茂らせ、身近な地域へ、そして遠く地球全体へと広く大きく展開させます。

次に『調査・研究』と『リ・クリエーション』という葉も、茂らせなければなりません。動物園に関わる事柄について、日々の観察や科学的根拠に基づいて取り組むとともに、憩いの場 を提供することも大切です。

木の「根幹」にあたる取組みは『動物福祉』です。動物たちの生活の質を向上させる姿勢をしっかり根付かせ、太い幹をつくることで、円山動物園という木は大きく成長できます。

この木の周囲に広がる輪は、円山動物園が『連携』する外部の世界を示しています。他の動物園や博物館、学校、市民団体、企業などといった、周りの「木々」とともに豊かな「森」を形成し、「自然と人が共生する社会」を築きあげます。

※リ・クリエーション：このビジョン2050では、「re-creation＝再創造」と定義づける。

Ⅱ　基本理念に基づく取組

保全 (Conservation)

Ⅱ-1. 生物多様性を保全する

Vision 1 保全

○地球のために

世界に向けて保全活動を展開

近年、地球上の動植物種がかつてない速さで絶滅しています。私たち一人一人の日常生活は、地球の環境を変化させ、離れた地域に暮らす野生動物たちにまで影響を与えています。円山動物園は、世界規模の保全活動に貢献します。

飼育する動物の生息地の保全に関わる

円山動物園は、野生動物種を飼育展示しています。たとえ海外であっても、その動物種の本来の生息地の保全、野生下での個体群維持に貢献することが必須です。円山動物園は、飼育する野生動物種について、生息環境の保全活動に携わります。

積極的に動物園の外に出て、本来の生息地に赴くなど現地の保全活動に参加します。保全の現場感覚を養い、どのような取り組みが求められているのかをしっかり理解します。その上で、普及啓発や環境教育活動、保全の担い手の育成、活動拠点の整備など、現地での取り組みにつなげていきます。

飼育展示を通して生息環境の保全の必要性を訴え、寄付や募金を募るなど、十分な活動資金を獲得するための仕組みを構築します。それらの資金を、保全活動の現場に提供し、生息地の保全に直接活用できるように支援します。

☑生物多様性

生物多様性は３つのレベルで捉えられます。

○生態系の多様性：地形・地質や気候などの環境と、そこに構成される生き物同士のつながりが多様なことをいいます。

○種の多様性：動植物から微生物に至るまで生き物の種類が多様なことをいいます。種間の多様性ともいいます。

○遺伝子の多様性：同じ種類の生き物であっても形や模様・生体が異なるなど個性が多様なことをいいます。種内の多様性ともいいます。遺伝子の多様性が減少した生物種は、絶滅の可能性が高まります。つまり遺伝子の多様性の減少は生物多様性のすべてのレベルに影響が及びます。言い換えると「進化の可能性」であり、多様な遺伝的情報は何らかの環境変化が起きた時に対処するための引き出しの役割を果たすものです。

動物園で健全な個体群を維持

動物園は本来の生息地で個体数を減らしつつある野生動物にとって、個体群維持のための貴重な生息地の一部として捉えることができます。将来的な野生個体群の絶滅を防ぐため、飼育している動物を用いた野生生息地への再導入や野生個体群の補強を行うための原資とするとともに、動物の展示を通して生物多様性保全への興味関心を高め、行動する人々を育てる場として持続的に機能するため、健全な飼育個体群の維持と増殖に取り組みます（生息域外保全）。

生息域外保全の取り組みを行うにあたり、重要なのは遺伝的な多様性です。それを維持するために、国内外の動物園等と協力して、繁殖技術の確立、適切な分析に基づく繁殖計画の立案・推進に努めていきます。

地球環境の持続可能性に配慮

地球の気候変動により、多くの生物が絶滅の危機にさらされています。温室効果ガスの排出量を削減するため、無駄なエネルギーの使用を控えるとともに、水や熱の循環設備の導入によるエネルギーを効率的に活用や太陽光や風力などの再生可能エネルギーを積極的に導入します。

プラスチックの誤飲や、化学物質による汚染など、環境中に排出された人工物で、多くの野生動物が苦しんでいます。環境中に排出される人工物をできるだけ減らすため、園内で出されるゴミを可能な限り削減するとともに、再資源化や分別の徹底、人工的な汚染物質の排出削減を徹底します。

莫大な人口を支えるための食料生産に伴い、農地開発が進み野生動物の生息環境が消失しています。円山動物園では、少しでも環境への負荷を小さくするため、園内で利用する製品や、販売する商品に配慮します。例えば、地産地消を推進したり、フェアトレード商品を選択したりと、園内全ての施設をあげて野生動物の生息環境への負荷の低減に取り組みます。

※フェアトレード：開発途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することにより、立場の弱い開発途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指す「貿易のしくみ」

地球規模の環境問題の取り組むためにSDGs（持続可能な開発目標）を念頭に置いて活動します。17の目標のうち、「15 陸上資源」を筆頭に、「4 教育」「6 水・衛生」「7 エネルギー」「12 生産・消費」「13 気候変動」「14海洋資源」について円山動物園で取り組んでいきます。

☑　SDGs：持続可能な開発目標
(Sustainable Development Goals)

「国連持続可能な開発サミット（2015年９月にニューヨークで開催）」で採択された「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載されている気候変動に対する取り組みなど持続可能な世界を実現するための17のゴールと169のターゲットからなる行動計画。

☑　森林伐採による影響

ポテトチップスやカップラーメン、チョコレートなど私たちの身近な食品に使われているパーム油。パーム油を生産するアブラヤシ農園は、熱帯の森林を切り開いて作られ、インドネシアとマレーシアでは、過去20年の間に九州の全面積に匹敵する約360万ヘクタールの森林が伐採、燃やされています。ボルネオ島のオランウータンの生息数が、過去100年間で90%も減少するなど、希少な野生動物が絶滅寸前に追いやられているほか、膨大な温室効果ガス大気中に放出されています。

Vision 2 保全

○地域のために

地域の中核を担う 保全活動の拠点に

円山動物園が地域の生物多様性保全に欠かせない存在になるよう、飼育展示する動物種だけでなく、生態系・種・遺伝子の全てのレベルにおいて、地域の生物多様性の保全に取り組みます。

北海道の生物多様性

個々の野生動物をとりまく環境を生態系レベルで維持するために、森林や河川、草原、湿地、干潟などの環境の保全に取り組みます。

保全活動の中心拠点として、地域の希少種や絶滅危惧種の生息状況・保全状況をしっかりと把握し、北海道や札幌市のレッドリストに掲げられる種を中心に、外部の保全機関や研究機関とともに、保全活動に貢献します。

☑ 外来生物

外来生物とは、本来生息しない地域に人間の活動によって持ち込まれた生物のこと。円山動物園の周辺でも在来の生態系に様々な影響を与えている。

アライグマ

地域の生態系を適切に保全するため、生態系を攪乱し悪影響を与える外来生物の除去活動や、拡散防止に貢献します。

人間社会と野生動物の摩擦を軽減し、よりよい関係を築くためには、農作物被害をはじめとする獣害への対策や、増えすぎた個体数を減らすなどの対策も必要です。円山動物園は、これらの対策についても関係機関と連携しながら健全な生態系維持のための役割を果たしていきます。

円山動物園周辺の生物多様性

円山動物園の周辺には、円山原始林をはじめとして、非常に豊かな自然環境が残されています。こうした札幌市民の生活にとって欠かせない生態系を守り育てていくため、円山動物園が市民とともに調査や保全啓発に取り組み、地域の活動拠点として保全を進めます。

円山動物園と地域の生態系とのつながりを重視し、昆虫や植物なども含めた生態系の保全に取り組みます。

円山動物園で飼育しているかどうかに関わらず、地域の生物多様性の保全に取り組みます。各地で行われている保全活動の情報を得ながら、円山動物園の独自の保全活動を企画・立案し、園外での保全活動を主体的に展開します。

☑ 円山動物園の周辺環境

円山動物園は、たくさんの人が暮らす都市部と、豊かな大自然が交わるところに位置します。

☑ ニホンザリガニ

かつては身近な水辺にたくさん棲んでいましたが、現在は、開発の影響や外来種による圧迫などで生息できる環境が激減し絶滅危惧種になっているニホンザリガニ。こうした北海道に生息する野生動物の繁殖・育成技術を確立するとともに、円山地区の生息地への野生復元・定着に向けた取組に着手します。

教育（Education）

II-2. 自然の大切さと動物の魅力を伝える

○地球のために

教育 1 世界中の野生動物のことを発信

遠く離れた地域で起こっている地球規模の環境問題は、なかなか実感することができません。世界各地の野生動物種を飼育展示する動物園だからこそ、世界の現状や保全の必要性を伝える発信基地となることができます。

地球からのメッセージ

動物園にいる動物たちは、地球からのメッセージを伝える大使です。飼育展示を通し、動物たちの姿や形だけではなく、多様な野生動物が存在する地球環境の素晴らしさ、生物多様性の重要性を伝えます。

動物園が野生動物種を展示する意義は、その動物種の本来の生息環境の保全に還元されてこそ意味があります。飼育するすべての動物の保全への貢献を常に念頭に置いて、生息環境の現状を世界的な視野で展示と解説を行い、来園者に正しく伝えます。

我々の日常の生活が、遠い地域に住む動物たちの生息環境に負荷を与えていることもあります。我々に何ができるのか、普段から何を心がけるべきか、動物をまもるために、地球環境の問題についても伝えます。

動物園内のみならず、園外へ自然の大切さや動物の魅力を伝えるための手段を整備するとともに、メディア等も活用し、より効果的な情報発信を行います。

☑ なぜホッキョクグマを飼育するの？

飼育動物を通して、私たちの日常生活が動物たちの生息環境に深く関わっていることを伝える。そのために、動物園は世界各地の動物を飼育展示しています。飼育種の生物学的な特徴を説明するだけでなく、より関心や興味を深めてもらえる工夫をしています。

（画像）
ホッキョクグマ館サインの写真

野生へ誘(いざな)う扉

動物園を訪れたことをきっかけに、野生動物に親近感を持ったり、身近な生き物への関心を高めるために、飼育施設をはじめとして、動物園内の空間を、できるだけ生息環境に近い状態に整備します。

動物園が野生への入り口として機能するような工夫を施します。自分自身で野外観察ができるように観察の仕方を伝えたり、他の地域に野生動物を見に行きたくなるように観察地や他施設を紹介したりするなど、野外へ出るステップを意識して取り組みます。

各地域で保全や研究に取り組む団体や機関が、円山動物園で情報を発信し、普及啓発活動に取り組める体制を構築します。各地の活動を伝えるとともに、来園者や市民に現地での活動への参加を促すなど、円山動物園が現地とつなぐ役目を果たします。

野生動物種が、愛玩動物種（ペット）とは異なることや、人間と野生動物とのつきあい方・距離感、野生動物に対する生命観を考えてもらう機会を提供します。また、野外での野生動物との望ましい接し方についても啓発していきます。

☑ プログラムの充実

園内動物病院体験プログラム

Design 2 教育

○地域のために

総合的なフィールドミュージアムとして地域の教育拠点に

円山動物園をとりまく豊かな自然環境は、すべてが体験の場であり学びの場です。そして、円山動物園の周辺施設との連携、博物館などの教育施設や市内の公園などとも融合することで、大きなフィールドミュージアムを築き、自然の大切さや動物の魅力を伝えていきます。

“生きている”を伝える博物館

動物園は生きた動物を展示する博物館です。動物の生の姿、声、匂いを実際に感じることで、テレビやインターネットとは異なる、本当の生命を実感してもらうことが動物園の大きな役割です。来園者に豊かな感性を育んでもらえるよう、動物たちの生き生きした姿を見せる展示、伝え方を考えていきます。

動物園が地域の教育をサポートするため、動物に関する科学的な最新情報の入手に努め、科学の面白さを伝えます。子どもだけでなく、大人にも満足してもらえる学術的な内容や、幅広い年齢層に対応できるプログラムや解説板、展示物を作ります。

動物たちの形態や行動の様々な特徴は、進化という現象を通して地球環境によって作り上げられたものです。異なる地域や環境に住む動物を、同じ場所で比較観察できるのは、動物園ならではの醍醐味です。多様な動物を飼育展示することで、動物たちの体や行動の多様性を実感できるよう工夫を凝らします。

動物の野生的な姿に「怖さ」を感じたり、動物の死に「悲しみ」を味わったり、生命に対しての感覚を豊かにする伝え方を心掛け、情操教育への効果を発揮するよう取組みます。

動物を慈しむ心や他者との関係性について考える想像力を育むことを目的に、畜産種や愛玩種を中心とした動物とのふれあいの場を提供します。

多様なアプローチ

見学・体験プログラムをはじめ、来園者が参加できるプログラムを充実させます。また円山動物園の森などを使って、園内でも自然環境を体感してもらえるよう取り組みます。

普及啓発の場は、動物園内だけにとどまりません。自然と共生する社会を築くため、野外で自然観察会を行うなど、生物や環境問題に関する普及啓発活動を実施します。円山原始林や近隣の自然のなかで、参加型の調査活動や観察会を通して、地域の生態系に関する普及啓発に力を入れます。

学校教育で活用できる教育プログラムを開発し、有効に利用してもらえるよう小中学校に向けて発信していきます。また、博物館や教育機関とともに、動物や環境への理解を促すための教材の開発に取り組みます。

☑ 教材の提供

画像
コウモリのトランクキットなど
準備中

園内で市民向けのフォーラムを積極的に開催するほか、園外でのシンポジウムへの参画や、外部に講師を派遣するなどし、普及啓発の場を広く展開させます。

紙媒体やホームページなど、様々な手法を有効活用し、小中学校を中心に、動物園の取り組みのほか、人間との適切な距離感や野生個体への配慮等をより幅広く伝えます。

III 基本理念を支える取り組み

調査・研究 (Research)

III-1. 動物のこと環境のことを探求する

円山動物園の基本理念である保全や教育を展開するうえで、調査研究は大きな支えとなります。研究機関や民間団体などと協力して、野生動物種の生理や生態の解明をはじめ、動物に関するさまざまな調査・研究に取り組みます。

動物園における調査・研究の必要性

野生動物の研究は難しく、生理や生態が分かっていない動物種は数多くいます。動物園で飼育している野生動物種を対象とした研究は野外での研究を補完し、彼らの生理や生態を知る手掛かりとなり、野生動物の管理、保全に大きく貢献することとなります。

すべての事柄について探求する

動物の生理や生態に関する内容、獣医学的な事柄を主な対象としつつ、それ以外にも、野外の保全活動に寄与するための研究、動物園の効率的な経営や利用者の動態といった運営に関する研究など、動物園に関係するすべての事柄に対して、調査や研究を推進します。

外部へも積極的に協働を働き掛けます。外部機関との共同研究を効率よく提携できるように、また外部からの研究協力の要請に対応できるよう園内の体制を整備します。

自ら新たな研究テーマをうちだし、主体的な調査研究を企画、立案、実行します。調査研究に必要な予算を確保し、できるだけ多くの職員が、調査・研究に携わることのできる時間と環境を整えます。これまでの研究活動を、よりいっそう発展させるとともに、新たな人材育成に励みます。

☑ センターラボ

円山動物園の「は虫類・両生類館」の中央にある研究施設。希少なは虫類両棲生類の飼育や繁殖技術の確立に取り組んでいる。

調査・研究の技能を磨く

職員がつねに新しい調査方法や研究方法を学べる体制を確立します。調査研究の技術を磨くために、積極的に外部から講師を招聘します。また、調査や分析技術の習得のために、園外での研修や技能訓練を受講する機会を設けます。

新しい発見や、改善のための研究テーマを意識し、日頃から適切に必要な記録を行い、保存・管理します。また、園内でも定期的に研究発表会や情報収集に取り組み、相互のレベルアップを図ります。

動物園関連の研究集会に加え、関係する学会やシンポジウムなどに積極的に参加します。情報収集と連携強化に取り組み、調査研究に対する信頼と期待を得られるよう努めます。

調査や研究の結果を、学会や論文で発表します。関係機関に情報を提供するとともに、市民に対しても分りやすい報告書を作成したり、成果報告会や市民向けフォーラムを開催するなど、研究成果を様々な機会を捉えて発信します。

リ・クリエーション(Re-creation)

III-2. 楽しい空間を創造する

『保全』や『教育』の取組みを最大限に進めるためには、みんなに安全に楽しく気持ちよく過ごしてもらえることが大事です。動物園の目指す理念の達成には、より楽しく居心地のよい空間を創り出すことが欠かせません。

リ・クリエーションの場としての動物園

レクリエーション（recreation）という言葉は、ラテン語の「re-creare」が語源と言われており、回復するや元気づける、新たに創造するといった意味があります。円山動物園は、元気を回復したり、新しい考え方や意識を芽生えさせたり、無邪気な心を思い出したりと、豊かな人間性を再創造してもらうことが動物園の役割と考えてるため、ここでは、リ・クリエーション＝再創造という言葉を使います。
円山動物園は、来園者に、居心地のよい空間を提供するとともに、リ・クリエーション＝再創造の場を提供します。

動物を楽しむという文化を根付かせる

来園者により楽しんでもらうために、解説や展示物などについて工夫を凝らしたり、体験型のイベントや案内ガイド、特別展の実施などの取り組みを充実させます。

行動観察のポイントや他の動物との比較、最新情報から豆知識まで、よりいっそう動物好きになってもらえるよう情報発信します。初めての方から、何度も訪れてくれる方まで、幅広く楽しんでもらえるよう工夫します。

動物への興味・関心は、絵画や音楽などの文化的対象と同様に、奥の深いものです。熱心な「こだわり」を持つ方々にも満足してもらえるような、深い見識や情報を提供します。

来園者が楽しい思い出を持ち帰ることができるように、職員のみならず、売店など円山動物園にかかわる一人一人がおもてなしの心を持って接します。

☑　フリーフライト

良質な憩いの空間を提供

動物を観察したり解説版や展示物を閲覧したりするだけでなく、動物の絵を描いたり、写真をとったり、お弁当を食べたり、くつろいだりと、様々な利用の仕方に満足してもらえるように安全で快適な空間を目指します。

小さな子どもやお年寄り、体の不自由な方でも、安全に移動ができ、安心して楽しく過ごせるように園内整備を進めます。

海外からの来園者にも分かりやすい、園内施設の案内や動物の解説方法について工夫・改善を行います。

売店や食堂施設なども含めて、動物園全体で楽しんでもらえるよう、統一感を持った園内の整備を進めます。また、植栽や園路などについても、動物の生息環境を想像できる空間づくりを進めます。

動物福祉(Animal welfare)

Ⅲ-3. すべての命に最善の暮らしを

動物たちが健康で栄養状態も良く、安全で野生本来の行動を発現できるような生活を送ることができる動物福祉に最大限に配慮することは、動物を飼育する者としての責務です。新たな情報と技術を取り込み、最も適した飼育方法や健康管理・診断・治療を実践します。また、動物の生活の質を高める工夫を、絶えず探求し取り入れます。

動物園における動物福祉の重要性

動物福祉を充実させ、来園者に動物たちの生き生きとした姿を楽しんでもらうことは、動物園を憩いの場として機能させるためにも大切です。一方、本来の行動と乖離した不自然な状態は、正しい調査・研究の妨げになります。できるだけ野生動物本来の行動を引き出すことは、来園者に動物に対する正しい理解を深めてもらう教育効果にも繋がります。

安全で健康な毎日を

動物たちの本来の食性を把握したうえで、栄養面にも配慮した飼料を提供します。

動物たちが安全安心に暮らせるよう配慮した動物舎を用意し、維持するほか、動物の移動や繁殖の際の同居などにあたっては、万全の準備を整え、事故のないよう、最善の注意を払います。

自然で充実した生活を

可能な限り本来の行動がとれ、もともと持っている能力を発揮できるような飼育環境を作ります。動物の行動を注意深く観察し、継続的に改善します。

豊かな行動のバリエーションを引き出し、動物たちに生理的・行動的・社会的な要求を満たせる機会をあたえるため、例えば環境エンリッチメントなど動物自身の行動の選択の幅が広がる取り組みを行っていきます。

☑　環境エンリッチメント

動物が本来とる行動を引き出すために、飼育施設に行う工夫のこと。餌を探して食べることに長い時間を費やすことを再現したり、自然に近い環境を作って本来の動作を引き出したり、複数個体で飼うことにより社会的な行動をとれるようにする。

質の高い獣医療の提供

万全の医療体制を整え、質の高い獣医療を提供します。動物診療技術の向上を図るとともに、必要な施設整備の充実に努め、予防医学及び治療医学に基づいた適切な獣医療を提供します。

必要な医療行為や健康管理であっても、ときに動物たちの負担になることがあります。ハズバンダリートレーニングを取り入れるなど、動物の治療等における負担軽減に努めます。

☑　ハズバンダリートレーニング

動物の健康維持のために必要な行為を、動物自らが進んでとってくれるよう学んでもらうこと。それにより、例えば、採血の際、動物が自らの意志で手（肢）を差し出したり、口腔内の検査の時、口を開けたりすることが出来るようになる。

☑　予防医学

健康を損ねる要因を取り除き、疾病の発生や悪化を防ぐことを目的とする医学で、積極的予防(第一次予防)、早期発見・早期治療(第二次予防)、および悪化防止と社会復帰(第三次予防)の３段階に分けられる。第一次予防には検疫、予防接種、衛生管理などの感染症対策だけではなく、栄養、獣舎の安全、生活環境など飼養管理も含まれる。第二次予防は健康診断、第三次予防として再発予防、リハビリテーションなどがある。動物園には大型動物や危険な動物など、疾病発症後の継続的な治療などが困難な動物種が多いため、治療医学だけではなく、動物の健康を維持するための予防医学は特に重要となる。

よりよい飼育体制を目指して

動物福祉の取り組みを適切に進めるため、生理的、臨床的、行動に基づいた指標など、科学的な基準を導入して、ガイドラインを整備します。整備したガイドラインにより動物福祉の達成を評価します。

動物福祉は、国や文化によって多様な考え方があります。職員が共通の認識をもてるよう互いに情報や意見の交換を重ね、動物園をあげて飼育の質を向上させます。

求められる動物福祉の状態を達成するためには、飼育面積の確保も必要です。計画的かつ適切に、飼育種数や飼育個体数を検討します。

つねに動物福祉を念頭において、飼育・展示施設を改善・改修します。十分な飼育スペースの確保を目指すとともに、老朽化への対応、最新設備の導入など、動物たちが安全かつ快適に暮らせるよう動物舎の補修や新築に取り組みます。

連携(Cooperation)

III-4. 力をあわせて共に未来へ

自然と人が共生する社会を築くために、様々な方々とともに学び、ともに考え、ともに成長していきます。

動物園が作る連携の絆

円山動物園を支えてくれる専門家やアドバイザー、動物園と一緒に理念を達成してくれるパートナーとともに、保全活動や教育活動、調査研究の取り組みを強化します。また、円山動物園が中心となって、関係部局や企業、公的機関、民間組織、市民などと連携の絆をつくりあげ、人材を育成する役割も担います。

市民や民間団体と

円山動物園は市民や市民団体と連携して、地域の生態系保全や環境教育に取り組むとともに、環境に関連する活動への参画や人材育成を進めるほか、市民や市民団体からの動物園運営に対しての支援を通した連携を推進します。

民間企業と

円山動物園は民間企業と連携して、生物多様性の保全に係る活動や資金提供など環境に関連するＣＳＲ（社会貢献）活動の場としての強化を図ります。

学校と

円山動物園は学校と連携して、動物園を活用した教育プログラムを作成し、実施します。

社会教育施設と

円山動物園は、博物館や図書館等の社会教育施設と連携して、教育資産や人材の相互活用を図るなど環境教育を多角的に進めます。

研究機関と

円山動物園は大学等の研究機関と連携して、研究活動の充実と研究成果の共有化を図るとともに、研究や人材育成の場としての機能強化を図ります。

国や北海道と

円山動物園は国や北海道と連携して、野生生物保全や外来生物対策を推進します。

道内の動物園・水族館と

円山動物園は道内の動物園・水族館と連携して、道内の生物多様性の保全に貢献するとともに、飼育技術の共有・向上に取り組みます。

国内の動物園・水族館と

円山動物園は国内の動物園・水族館と連携して、各動物種の血統管理や繁殖に取り組みます。また、日本動物園水族館協会の運営や取り組みに積極的に関与し、日本の動物園としての責任を果たします。

海外の動物園・水族館や大学などの研究機関と

円山動物園は海外の動物園・水族館や大学などの研究機関と連携して、飼育や運営に資する情報を入手するだけでなく、保全に関する国際的な動向の把握や生息地の近況、最新の知見などを取り入れます。また、国際基準の動物園運営の達成を目指すとともに新しい血統の導入のための関係を築きます。特にアジア地域のネットワークの一員として、アジアの生物多様性保全に大きく貢献します。

Ⅳ 実現するために

Ⅳ-1. コレクションプラン

円山動物園は“保全”と“教育”の二つの基本理念を掲げ、「自然と人が共生する社会」を目指すため、下記の観点から、今後の動物種の飼育方針を定めます。

1　考慮すべき項目

個々の種について下記の４つの項目を考慮し、推進種（※1）、継続種（※2）、撤退種（※3）に選定します。「保全に関する取り組みの必要性」と「教育・メッセージ」は動物園で飼育する意義となる項目であり、「動物福祉の確保」と「飼育の持続性」は飼育に必要な条件となる項目です。

○保全に関する取り組みの必要性（A）
絶滅の危機に瀕している又は将来的にその恐れがあり、国内外において種の保存に取り組まれている種であり、円山動物園として繁殖・維持・余剰個体飼育施設としての役割を背負うべき種。

○教育・メッセージ（B）
当該動物の飼育により生物多様性や生息地の保全を伝えることができるほか、情操教育に資する種。

○動物福祉の確保（C）
飼育面積や環境の確保など、動物福祉を充実させた飼育環境を用意することが可能であり、動物福祉の向上に取り組むことができる種。

○飼育の持続性（D）
持続的に飼育・繁殖させるために、寿命や国内外での飼育頭数などを考慮し、将来的にも入手が可能な種

※1　推進種…動物園など国内外の施設と連携し積極的に飼育・繁殖に取り組む種
考慮項目ＡかつＢの必要性があり、かつＣとＤについて実現可能な種。

※2　継続種…飼育を継続し、必要性等に応じて繁殖に取り組む種
考慮項目Ａ又はＢの必要性があり、かつＣとＤについて実現可能な種。

※3　撤退種…将来的に飼育を中止する種
考慮項目Ｃ又はＤについて実現が困難な種、もしくはＡやＢの項目に関し代替種等と比較して、予算、人、スペース等の効率的な資源分配の視点から将来的に飼育から撤退すべきと判断される種。撤退種に選定された種については、動物福祉の充実につながる他園館への移動を積極的に検討し、それが困難な場合は当園にて終生飼育を行う。

2　主な推進種、継続種、撤退種

１で示した考え方を踏まえ、主な推進種、継続種、撤退種は以下のとおりです。

○推進種

・オランウータン
森林伐採などの影響で絶滅の危機にあり、アジア各国の連携により動物園における保全活動が行われている。森林伐採の目的となるパーム油の生産は日本人の生活にも密接に関わっており、展示を通した積極的な環境教育活動を行うために必要な種。動物福祉に関しては、樹上行動などに配慮した施設が不可欠。

・フンボルトペンギン
産卵地の破壊や漁業における混獲などにより、絶滅が危惧されている。日本は飼育個体群が最も多く、生息域外保全の中心地域として継続的な繁殖計画の推進と、展示を通した教育活動が求められている。動物福祉に関しては、水中及び陸上での野生本来の行動に配慮した施設の増大が不可欠。

・北海道産動物
北海道の中心都市の動物園として、地域の生物多様性保全の重要性を来園者に伝えるとともに保全活動に取り組むため必要な種。

・ホッキョクグマ
これまでの繁殖技術を生かし国内の繁殖基地、そして、海外との交流拠点として保全に取り組む。

・アジアゾウ
国内での個体維持のために繁殖に取り組むとともに、アジアの最大陸生哺乳類の保全に寄与するよう様々な研究を進める。

○継続種

・家畜種(ヒツジ等)
人間以外の命を実感し、慈しみの心を持ってもらうため、ふれあいの充実を図ることができる動物として必要な種。

・ライオン
アフリカの食物連鎖の頂点となる種として、生態を見せるとともに生息地の他の動物とのつながりを伝えるため必要な種。

・アライグマ
地域の自然環境に大きな影響を与え、生物多様性を脅かすおそれのある外来種問題の提起を行うために必要な種。

○撤退種

・ブチハイエナ
個体確保困難及び動物福祉に配慮した飼育面積の確保が困難。

・クロザル
個体の入手及び維持が困難。アジア系のサル類の代替種としてシシオザルを選定。

・ゼニガタアザラシ
飼育スペースの確保等の観点から、代替種としてゴマフアザラシを選定
（ホッキョクグマ館での海獣類飼育種）。

・シンリンオオカミ
群れ内で優位なオス、メスが出現し個体間闘争が多くなる種の特性により、飼育面積の確保など動物福祉を保ちながらの繁殖を見据えた継続飼育が困難。

3　コレクションプランから想定される施設整備

○北海道ゾーン
海獣舎跡地周辺を中心として、北海道に棲む生物を飼育する北海道ゾーンを整備。園内で飼育している道内生息種を集めるとともに、必要種を導入し、北海道の自然環境と生物の関係を知るきっかけとなる場所とする。

○南米ゾーン
熱帯鳥類館を中心として、南米に棲む生物を飼育する南米ゾーンを整備。フンボルトペンギンは陸上での生活も伝えられる丘陵地も含んだ施設とし、熱帯鳥類館内では哺乳類、鳥類の混合展示を行う。

○こども動物園
保全教育を行うにあたっての入り口と位置付け、人間以外の命を実感できるよう「ふれあい」を充実させ、学校教育等との連携も深めるため、施設の拡充を行う。

○類人猿館
老朽化した類人猿館横に、オランウータンを中心としたアジアの森に棲む動物を飼育する施設を整備。熱帯雨林の必要性について伝え、来園者が保全活動に携われるきっかけとなる施設とする。

※撤退した種の飼育スペース等の資源は、推進種を中心とした動物の動物福祉充実のため活用。

4　コレクションプランの見直しについて

「ビジョン2050」に基づく実施計画（5ヵ年）の策定等に合わせて、コレクションプランの見直しの必要性について検討する。

Ⅳ-2. 実施体制

「ビジョン2050」を推進するためには、現行の動物園の運営体制の見直しや新たな制度の構築などが不可欠です。課題等も整理しながら、以下の観点から2050年まで順次体制の強化を図ります。

組織体制

○生物多様性の保全と環境教育を推進するために
- 専門に担当する係の新設など環境教育部門の強化を図ります。
- 札幌市の関係部局がビジョン2050を共有し、円山地区を拠点として関係部局が進める地域の生物多様性の保全や環境教育を推進するとともに、さらに充実を図り効果的に取り組むために、動物園とは別に、例えば生物多様性センターの創設など関係部局の円山地区への集約なども視野に入れた検討を行います。
- 世界動物園水族館協会（WAZA）への加盟など世界規模の生物多様性の保全に貢献できる体制を構築します。

○来園者の知的好奇心に応え、憩いの場を提供するために
- 獣舎や園路、植栽の整備のほか、子どもから大人まで興味がわく解説板の設置、地下鉄円山公園駅から動物園へのアクセス改善など、総合的かつ長期的に検討できる体制を構築します。

○動物福祉に配慮するために
- 動物専門員の飼育技術向上のため、他動物園などと人事交流を可能とする方策を検討します。
- 動物福祉や獣医療の充実を図るため、動物栄養学や動物心理学、動物看護など動物専門員の専門性をさらに高めます。
- 安定した獣医療を提供するため、獣医師職を継続的に確保できる制度の新設を目指します。
- 施設ごとの修繕カルテを作成し、今後の施設整備計画に活用など、経費削減を見据えた老朽化した施設の効率的な整備のため、建築を専門とする技術職の配置を目指します。
- 専門的かつ経験に基づいた判断を要する園長職を長期に配置できる仕組みの構築を目指します。

経営基盤

○生物多様性の保全や調査・研究などの資金調達を視野に入れた民間企業との連携を強化するために、渉外を担当する係を新設するとともに、基金の創設を目指します。

○入園料の見直しや減免制度の在り方などの受益者負担の適正化を図ります。

○資金の弾力的な運用を図るため、特別会計制度の導入を検討します。

○永続的に動物福祉を基盤に運営できるように条例などの法的整備を視野に入れた検討を行います。

Ⅳ-3. 行動指針

札幌市円山動物園は、札幌市民はもとより、世界中から訪れる来園者に愛される動物園であり続けるため、以下の行動指針に従って行動します。

○生物多様性を保全するために
環境教育・学習の拠点で働く職員として、「環境首都・SAPP_RO」の実現に向けた市民の配慮指針である「地球を守るためのプロジェクト・札幌行動～市民行動編（さっぽろエコ市民26の誓い）」※に率先して取り組み、市民の模範となる行動を実践します。

○環境教育を推進するために
飼育展示している動物たちを通して、地球環境の現状や生物多様性の必要性などを伝えます。
（1）担当動物についての解説を定期的に実施するとともに、それ以外の時間帯についても積極的に来園者の前に出向き、動物の紹介や疑問に対して丁寧に対応します。
（2）来園者の興味や関心を引く環境教育に繋がる取り組みを自ら立案し実践します。
（3）動物の飼育展示や診療を担当している以外の職員についても、生物多様性や地球環境の保全の大切さを伝える活動を積極的に行います。
（4）分かりやすいホームページや効果的なＳＮＳの活用などにより、動物園の取り組みを積極的に発信します。
（5）積極的に園外に赴き、生物多様性や地球環境保全の大切さを伝えます。

○心地よく過ごしていただくために
来園者に対して、常におもてなしの気持ちを持って接します。
（1）来園者と積極的にコミュニケーションを図り、来園者の立場に立った分かりやすく丁寧な対応を心がけます。
（2）来園者のご意見・ご要望を真摯に受け止め、業務の改善とさらなる充実に活かします。

○動物福祉に配慮するために
動物を飼育するものとしての責務である動物福祉の向上に取り組みます。
（1）まず基本を身につけ、絶えず基本に立ち返りながら日々の飼育業務に取り組みます。
（2）日々、調査研究に邁進し、飼育や動物診療技術のほか、動物栄養学や行動心理学など様々な知見の収集に努め、動物に寄り添った飼育に取り組みます。
（3）動物本来の行動を発現できるようにするため、全ての動物に対してエンリッチメントの充実に取り組みます。
（4）動物の飼育展示や診療を担当している以外の職員についても、動物たちの状態の変化に気づくことができるよう、動物についての知識を身に着けるとともに、日々情報収集を行います。
（5）全ての動物たちに対して、誰が受け持っても365日同じく高いレベルの快適な飼育展示環境を提供するため、全職員のスキルアップ、レベルアップに職員一人ひとりが自ら取り組みます。
（6）全ての動物たちを対象に動物種に応じた適切な頻度と内容で健康状態の把握を行い、健康管理・疾病予防を充実させます。また、動物個体によっては、ハズバンダリートレーニングを活用して麻酔の使用を避けるなど負担の軽減を図ります。

Ⅳ-3. 行動指針

○チームワーク
　自らの能力を最大限に発揮し、チームワークの強みを最大限に生かして業務を遂行します。
（1）市職員のほか、清掃や警備、券売等の管理業務を委託する業者、売店や食堂、ボランティアなど円山動物園の運営に関わる一人ひとりが、組織を超えて目的を共有し、責任を持って行動します。
（2）自由闊達に意見が交わされるとともに、多様な人材がそれぞれの個性と能力を発揮し、新しいことに果敢に挑戦できる風通しの良い職場作りを推進します。
（3）それぞれがお互いの立場に立ち、寄り添いながら職務を遂行できるよう、意識改革や積極的な情報共有を行います。

○コンプライアンス
　法令等の遵守のほか、札幌市の定める内部規定や業務マニュアル等に基づき誠実に業務を遂行します。
（1）相互チェック体制の構築や監査結果への適切な対応、内部ルールの明確化（既にあるものについは、その周知徹底を含む）、マニュアル作成、適切な業務引継ぎなど、内部統制を徹底します。
（2）緊急事態発生時の連絡体制の明確化や事故等発生時の原因究明と再発防止を徹底します。
（3）非常事態に備えた訓練や安全衛生対策、対外的な信頼の確保（特に情報提供、広報、SNS対策）、第三者評価の活用など、リスクマネジメントを徹底します。
（4）内部研修、外部研修の計画的実施、法令に基づく研修、法令や内部規則等に関する知識についての研修等に積極的に参加します。
（5）飼育動物の個体情報や飼育方針などを積極的に開示し、市民に広く開かれた動物園を目指します。

※さっぽろエコ市民26の誓い：平成20（2008）年に宣言した「環境都市・札幌」の一つとして構成され、平成30（2018）年３月に策定された第２次札幌市環境基本計画に合わせ見直された市民が行動する際の配慮の指針。

Ⅴ-1. 検討経過

「ビジョン2050」検討部会委員名簿

平成30年（2018年）３月31日現在

	氏　名	所属・役職
	佐藤 香	前市民動物園会議委員・手稲区おもちゃ図書館ボランティア
	高野 克也	札幌まるやま自然学校代表
○	福井 大祐	岩手大学農学部共同獣医学科 准教授
	福津 京子	札幌人図鑑　オフィス・福津代表
	水落 隆志	札幌商工会議所 常務理事・事務局長
◎	吉中 厚裕	酪農学園大学農食環境学群環境共生学類 准教授

（50音順・敬称略）
（◎：委員長、○：副委員長）

「ビジョン2050」策定経過

職員プロジェクト（計21回開催）

相互に共有しながら検討

- 第32回市民動物園会議（29.6.5）
- 第1回検討部会　（29.11.6）
- 第33回市民動物園会議（29.11.13）
- 第2回検討部会　（29.12.13）
- 第3回検討部会　（30.2.7）
- 第4回検討部会　（30.2.23）
- 第5回検討部会　（30.3.12）
- 第34回市民動物園会議（30.4.4）
- 第６回検討部会　（30.7.30）

V-2. 検討経過

市民意見の反映に関わる取組

来園者アンケート

（１）実施期間
12月24日（日）～１月22日（月）のうち10日間。
（２）実施方法
動物園正門及び西門において、退園者に対し協力依頼を行い、アンケート回答者には粗品（ステッカー）を贈呈することにより実施。
（３）回答数　425枚。

市民意識調査

（１）調査期間
１月12日（金）～１月26日（金）
（２）実施方法
札幌市広報部において、住民基本台帳から無作為抽出した18歳以上の市民５千人に調査票を郵送することにより実施。
（３）返信数　2,602通。

子ども（小学生３年生～中学生）を対象としたワークショップ

（１）実施日
12月３日（日）10：00～15：00
（２）実施方法
広報さっぽろへの掲載のほか、動物園内やホームページ、地下鉄円山公園駅等にポスターを掲示することにより先着20名を募集。当日は16名の参加。午前中は園内見学、午後は園内見学で感じたことなどの意見交換を実施。

大人（18歳以上）を対象としたワークショップ

（１）実施日
２月４日（日）13：00～16：30
（２）実施方法
住民基本台帳から無作為抽出した18歳以上の市民２千人に調査票を郵送することにより参加者20名を募集。応募数100名。当日は22名の参加。園内見学のほか、動物園の社会的役割などについて意見交換を実施。

シンポジウム「北海道の動物園の未来を語ろう！」

（１）実施日
３月11日（日）13:00～16：00
（２）内容
ア　神奈川大学法学部准教授諸坂佐利氏による基調講演（60分程度）
「日本の動物園の課題、そして今後の展望」
イ　パネルディスカッション
「北海道の動物園・水族館の未来を語る」

VI. 円山動物園概要

【概要版】札幌市円山動物園基本方針「ビジョン2050」～自然と人が共生する社会を目指して～

2018年7月30日　第６回検討部会

策定の目的と位置づけ

2007年3月に「円山動物園基本構想」を策定し、この構想に基づく取組を進めてきたが、マレーグマの死亡事案の発生や不適正な契約事務の発覚など、動物園運営に関して様々な歪があることが明らかになった。また、動物福祉や生物多様性の維持など動物園を取り巻く環境や役割も大きく変化してきている。こうしたことを踏まえ、現基本構想に代わる円山動物園基本方針「ビジョン2050」を策定することとした。

目標年次については、生物多様性条約第10回締約国会議(COP10、2010年10月開催)で採択された愛知目標を踏まえ、国の生物多様性国家戦略、第２次札幌市環境基本計画、生物多様性さっぽろビジョン等の計画が、2050年を見据えて策定されていること、また、1951年に開園した円山動物園が100年目を迎える佳節の年となることから、2050年とする。

札幌市まちづくり戦略ビジョン

円山動物園基本方針
ビジョン2050

連携・整合

第２次札幌市環境基本計画　連携・整合

分野別計画
- 生物多様性さっぽろビジョン
- 札幌市環境教育・環境学習基本方針
- みどりの基本計画

Ⅰ 円山動物園の目指す未来

Ⅰ-1. 円山動物園基本方針「ビジョン2050」

2050年に目指すべき将来像を『自然と人が共生する社会』とする。

人が自然環境の一部であることを実感し、誰もが自然の必要性を感じ行動する社会を、みんなで実現させることを目標とする。

STEP 3　自然と人とが共生する社会が"実現"する

STEP 2　全ての人が自然をまもるために"行動"する

STEP 1　全ての人が自然環境の大切さを"実感"する

Ⅰ-2. 基本理念

保全と教育

"保全"と"教育"の二つの基本理念を掲げ「自然と人が共生する社会」を目指す。

【保全】生物多様性を保全する

地球上の動植物がかつてない速さで絶滅している。私たちの日常生活が、地球の環境を変化させ、生態系に影響を与えているが、このまま生物種が失われていくと人類も存亡の危機に直面する。円山動物園は、生態系・種・遺伝子の３つのレベルで生物多様性の保全に取り組む。

【教育】自然の大切さと動物の魅力を伝える

各地の野生動物種を展示する動物園だからこそ、動物を通して「自然と人が共生する社会」の必要性を具体的に発信することができる。楽しさや感動、記憶に残る体験を通して、自然環境の大切さ、動物の素晴らしさや魅力を伝える。

Ⅰ-3. 取り組みの構図

「自然と人が共生する社会」の実現に向け、「保全」と「教育」の基本理念を実践・展開していくためには、それらを支えるいくつもの取組みが必要。円山動物園は、「保全」と「教育」に加えて、「調査研究」「リ・クリエーション」「動物福祉」「連携」といった取組みに力を入れる。

Ⅱ 基本理念に基づく取組

Ⅱ-1. 生物多様性を保全する

Vision 2050 保全 1　世界に向けて保全活動を展開

飼育動物を通じて、世界規模での保全活動に貢献する。

- 飼育する野生動物種について、生息環境の保全活動に携わる。
- 本来の生息地に赴くなど現地の保全活動に参加し、保全の担い手の育成、活動拠点の整備など、現地での取り組みに繋げる。
- 活動資金を獲得するための仕組みを構築し、保全活動の現場に提供するなど、生息地の保全に直接的な支援を行う。
- 生息域外保全に積極的に取り組む。
- 遺伝的多様性を維持するため、国内外の動物園等と協力し、繁殖技術の確立、繁殖計画の立案・推進に努める。
- 無駄なエネルギーの使用を控え、水や熱の循環設備の導入を進め、再生可能エネルギーを積極的に導入する。
- ゴミを可能な限り削減するとともに、再資源化や分別の徹底、人工的な汚染物質の排出削減を徹底する。
- 地産地消の推進やフェアトレード商品の選択など全ての園内施設で環境負荷の低減に努める。
- 地球規模の環境問題の取り組むためにＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）を念頭に置いて活動する。

Vision 2050 保全 2　地域の中核を担う保全活動の拠点に

地域のすべての生物多様性の保全に関わり、保全活動の拠点を目指す。

- 森林や河川、草原、湿地、干潟などの環境の保全に取り組む。
- 札幌市や北海道のレッドリストに掲げられる種を中心に、外部の保全機関や研究機関とともに、保全活動に貢献する。
- 外来生物の除去活動や、拡散防止に貢献する。
- 農作物被害をはじめとする獣害への対策や、増えすぎた個体数を減らすなどの対策を、関係機関と連携しながら生態系維持の役割を果たす。
- 円山原始林をはじめとした札幌市民の生活にとって欠かせない生態系を守り育てていくため、市民とともに調査や保全啓発に取り組み、地域の活動拠点として保全を進める。
- 地域の生態系とのつながりを重視し、昆虫や植物なども含めた生態系の保全に取り組む。
- 円山動物園の独自の保全活動を企画・立案し、園外での保全活動を主体的に展開する。

Ⅱ-2. 自然の大切さと動物の魅力を伝える

Vision 2050 教育 1　世界中の野生動物のことを発信

世界の環境問題の現状や生物多様性保全の必要性を伝える。

- 飼育展示を通し、動物たちの姿や形だけではなく、多様な野生動物が存在する地球環境の素晴らしさ、生態系の重要性を伝える。
- 生息環境の現状を世界的な視野で展示と解説を行い、来園者に正しく伝える。
- 遠い地域に住む動物たちの生息環境をまもるために、地球環境の問題についても伝える。
- 園外へ伝える手段を整備するとともに、メディア等も活用し、より効果的な情報発信を行う。
- 動物園内の空間を、できるだけ生息環境に近い状態に整備する。
- 来園者や市民に現地での活動への参加を促すなど、円山動物園が現地とつなぐ役目を果たす。
- 人間と野生動物とのつきあい方・距離感、野生動物に対する生命観を考えてもらう機会を提供する。

Vision 2050 教育 2　総合的なフィールドミュージアムとして地域の教育拠点に

動物園周辺施設との連携や教育関連施設等と融合し、地域の環境教育の拠点を目指す。

- 動物たちの生き生きした姿を見せる展示、伝え方を考える。
- 地域の教育をサポートするため、科学的な最新情報の入手に努め、子どもだけでなく、大人にも満足してもらう。
- 生命に対しての感覚を豊かにする伝え方を心掛け、情操教育への効果を発揮するよう取組む。
- 動物とのふれあいの場を提供する。
- 来園者が参加できるプログラムを充実させる。円山動物園の森などを活用し、園内でも自然環境を体感してもらう。
- 参加型の調査活動や観察会を通し、地域の生態系に関して啓発する。
- 学校教育で活用できる教育プログラムを開発する。また、博物館や教育機関とともに教材開発に取り組む。
- 市民向けのフォーラムを開催するほか、外部に講師を派遣するなどし、普及啓発の場を広く展開させる。

札幌市円山動物園基本方針「ビジョン2050」

Ⅲ 基本理念を支える取り組み

Ⅲ-1. 動物のこと環境のことを探求する ｜ 調査・研究 (Research)

野生動物種の生理や生態の解明をはじめ、動物園に関する調査・研究に取り組む。

- 動物の生理や生態に関する内容、獣医学的な事柄を主な対象としつつ、動物園に関係するすべての事柄に対して、調査や研究を推進する。
- 外部機関へも積極的に協働を働きかけるとともに、外部機関からの研究要請にも対応できる体制を整える。
- 主体的な調査研究を企画、立案、実行する。調査研究に必要な予算を確保し、できるだけ多くの職員が、調査・研究に携わることのできる時間と環境を整える。
- 積極的に外部から講師を招聘する。調査や分析技術の習得のために、園外での研修や技能訓練を受講する機会を設ける。
- 日頃から適切に必要な記録を行い、保存・管理する。
- 調査や研究の結果を、学会や論文で発表する。関係機関に情報を提供するとともに、成果報告会や市民向けフォーラムを開催するなど、研究成果を様々な機会を捉えて発信する。

Ⅲ-2. 楽しい空間を創造する ｜ リ・クリエーション(Re-creation)

知的好奇心を満たし、より楽しく居心地のよい憩いの場を創り出す。

- 解説や展示物などについて工夫を凝らしたり、体験型のイベントや、案内ガイド、特別展の実施などの取り組みを充実させる。
- 行動観察のポイントや他の動物との比較、最新情報から豆知識まで、動物好きになってもらえるように情報発信する。
- 熱心な「こだわり」をもつ方々にも満足してもらえるように深い見識や情報を提供する。
- 職員のみならず、売店など円山動物園にかかわる一人一人がおもてなしの心を持って接する。
- 動物の絵を描いたり、写真をとったり、様々な利用の仕方に満足してもらえるような空間を目指す。
- 小さなお子さんやお年寄り、体の不自由な方でも、安全で快適に楽しく過ごせるように園内整備を進める。
- 植栽や園路などについても、動物の生息環境を想像できる空間づくりを進める。
- 海外からの来園者にも分かりやすい園内施設の案内や動物の解説方法などについて、工夫・改善を行う。

Ⅲ-3. すべての命に最善の暮らしを ｜動物福祉(Animal welfare)

動物たちが健康で栄養状態も良く、安全で野生本来の行動を発現できるような生活を送ることができる動物福祉に最大限に配慮する。

- 栄養面にも配慮した飼料を提供する。
- 動物たちが安全安心に暮らせるよう配慮した動物舎を用意・維持し、動物の移動などにあたって最善の注意を払う。
- もともと持っている能力を発揮できるような飼育環境を作る。
- 環境エンリッチメントなど行動の選択の幅が広がる取り組みを行う。
- 万全の医療体制を整え、質の高い獣医療を提供する。
- ハズバンダリートレーニングを取り入れるなど、動物の治療等における負担軽減に努める。
- 動物福祉の科学的な基準を導入して、ガイドラインを整備し、達成を評価する。
- 動物福祉に関して職員が共通の認識をもてるよう互いに情報や意見の交換を重ね、動物園をあげて飼育の質を向上させる。
- 計画的かつ適切に、飼育種数や飼育個体数を検討する。
- つねに動物福祉を念頭において、飼育・展示施設を改善・改修する。十分な飼育スペースの確保を目指し、老朽化への対応、最新設備の導入など、動物舎の補修や新築に取り組む。

Ⅲ-4. 力をあわせて共に未来へ ｜連携(Cooperation)

様々な方々とともに学び、ともに考え、ともに成長する。

- 市民や市民団体と、地域の生態系保全や環境教育に取り組むほか、動物園運営に対しての支援を通した連携を推進する。
- 民間企業と、資金提供など環境に関連するＣＳＲ（社会貢献）活動の場としての強化を図る。
- 学校と、動物園を活用した教育プログラムを作成・実施する。
- 博物館や図書館等の社会教育施設と、環境教育を多角的に進める。
- 大学等の研究機関と、研究活動の充実と研究成果の共有化を図る。
- 国や北海道と、野生生物保全や外来生物対策を推進する。
- 道内の動物園・水族館と、道内の生物多様性の保全に貢献する。
- 国内の動物園・水族館と、各動物種の血統管理や繁殖に取り組む.
- 日本動物園水族館協会の運営や取り組みに積極的に関与し、日本の動物園としての責任を果たす。
- 海外の動物園・水族館や大学などと連携する。国際基準の動物園運営の達成を目指す。特にアジアの生物多様性保全に大きく貢献する。

Ⅳ 実現するために

Ⅳ-1. コレクションプラン

円山動物園は“保全”と“教育”の二つの基本理念を掲げ、「自然と人が共生する社会」を目指すため、「保全に関する取組の必要性」と「教育・メッセージ」、「動物福祉の確保」、「飼育の持続性」の観点から、以下のとおり推進種、継続種、撤退種を選定する。

- 推進種
  - ・オランウータン
  - ・フンボルトペンギン
  - ・北海道産動物
  - ・ホッキョクグマ
  - ・アジアゾウ
- 継続種
  - ・家畜種（ヒツジ等）
  - ・ライオン
  - ・アライグマ
- 撤退種
  - ・ブチハイエナ
  - ・クロザル
  - ・ゼニガタアザラシ
  - ・シンリンオオカミ

コレクションプランを踏まえた施設整備

- 北海道ゾーン
- 南米ゾーン
- こども動物園
- 類人猿館

Ⅳ-2. 実施体制

「ビジョン2050」を推進するため、以下の観点から体制を整える。

組織体制

- 生物多様性の保全や環境教育を推進するために、専門に担当する係の新設など環境教育部門の強化を図るとともに、札幌市の関係部局の円山地区への集約を視野に入れた検討を行うほか、世界規模の生物多様性の保全に貢献できる体制を構築する。
- 来園者の知的好奇心に応え、憩いの場を提供するために、園内整備のほか円山公園駅から動物園へのアクセス改善など、総合的かつ長期的に検討できる体制を構築する。
- 動物福祉に配慮するために、動物専門員の飼育技術向上を目的とした他動物園などとの人事交流、栄養学・心理学、動物看護など動物専門員の専門性の向上、獣医師を継続的に確保できる制度の新設、建築を専門とする技術職の配置、園長職を長期に配置できる仕組みの構築を目指す。

経営基盤

- 生物多様性の保全や調査・研究などの資金調達を視野に入れた民間企業との連携を強化するために、渉外を担当する係を新設するとともに、基金の創設を目指す。
- 入園料の見直しや減免制度の在り方など受益者負担の適正化を図る。
- 特別会計制度の導入を検討する
- 条例などの法的整備を視野に入れた検討を行う。

Ⅳ-3. 行動指針

札幌市民はもとより、世界中から訪れる来園者に愛される動物園であり続けるため、以下の行動指針に従って行動する。

- 生物多様性を保全するために
  - ・環境教育・環境学習の拠点で働く職員として、市民一人ひとりが地球環境保全に取り組む決意を示した地球を守るためのプロジェクト「さっぽろエコ市民26の誓い」（2008年）に率先して取り組み、模範となる行動を実践する。
- 動物福祉に配慮するために
  - ・調査研究に邁進し、様々な知見の収集に努め、動物に寄り添った飼育に取り組む。
  - ・エンリッチメントの充実に取り組む。
  - ・経営管理課職員も、動物についての知識を身に着けるとともに、日々情報収集を行う。
  - ・365日同じく高いレベルの快適な飼育展示環境を提供する。
  - ・健康管理・疾病予防を充実させるとともに、ハズバンダリートレーニングを活用して麻酔を避けるなど負担の軽減を図る。
- 環境教育を推進するために
  - ・積極的に来園者の前に出向き、解説や質疑応答を行う。
  - ・環境教育に繋がる取り組みを自ら立案し実践する。
  - ・経営管理課職員も生物多様性や地球環境保全の大切さを伝える。
  - ・ＨＰやＳＮＳを効果的に活用し、積極的に情報発信する。
  - ・園外においても、生物多様性や地球環境保全の大切さを伝える。
- チームワーク
  - ・市職員のほか、清掃や警備、券売等の管理業務を委託する業者、売店や食堂、ボランティアなど円山動物園の運営に関わる一人一人が、組織を超えて目的を共有し、責任を持って行動する。
  - ・新しいことに果敢に挑戦できる風通しの良い職場作りを推進する。
  - ・意識改革や積極的な情報共有を行う。
- 心地よく過ごしていただくために
  - ・常におもてなしの気持ちを持って接する。
  - ・積極的にコミュニケーションを図り、来園者の立場に立った分かりやすく丁寧な対応を心がける。
  - ・来園者の意見ご要望を真摯に受け止め、業務の改善とさらなる充実に活かす。
- コンプライアンス

  法令等の遵守のほか、札幌市の定める内部規定や業務マニュアル等に基づき誠実に業務を遂行する。
  - ・内部統制を徹底する。
  - ・緊急事態発生時の連絡体制の明確化、事故等発生時の原因究明と再発防止を徹底する。
  - ・リスクマネジメントを徹底する。
  - ・法令や内部規則等に関する知識についての研修等に積極的に参加する。
  - ・情報を積極的に開示し、市民に広く開かれた動物園を目指す。